

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	指導内容や指導方法において特徴ある工夫が行われている実践事例
-------	--------------------------------

1. 基本情報

都道府県名及び市町村名

埼玉県熊谷市

学校名

熊谷市立奈良中学校

学校のURL

<http://www.kumagaya-nara-j.ed.jp/>

2. 学校紹介

学級数

【通常の学級】全学年各2学級、【特別支援学級】2学級、【合計】8学級

児童生徒数

【全生徒数】188人（平成23年10月1日現在）
（内訳：1年生68人、2年生48人、3年生72人）

学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校教育目標】

「自ら考え、他に貢献できる生徒の育成」

自ら学ぶ生徒 心を耕す生徒 体を鍛える生徒

【人権教育に関する目標】

豊かな人権感覚を培い、互いの人権を尊重することのできる生き方の基礎を育成する。

人権教育にかかる取組の全体概要

平成22・23年度 文部科学省・埼玉県教育委員会指定「人権教育研究指定校」熊谷市教育委員会委嘱「人権教育研究学校」として、研究主題『確かな学力を身につけ、自分の大切さとともに、他の人の大切さを認めることができる人権感覚豊かな生徒の育成』、副題「言語活動の指導を通じた人権感覚を育む授業・道徳・人間関係づくり」を設定した。

(1)取組の流れ

全教育活動を通じた言語活動の指導から取組をスタートさせ、授業研究を中心に行う。

言語活動の指導を縦糸に、授業・道徳・人間関係づくりを横糸として実践を行う。

熊谷教育の基本である「熊谷の子どもたちは、これが出来ます！」4つの実践！

と3減運動に挑戦！の確実な実践を土台として取り組む。

3. 特色ある実践事例の内容

言語活動の指導を通して生徒の人権感覚を育成する取組

(1)取組の目標

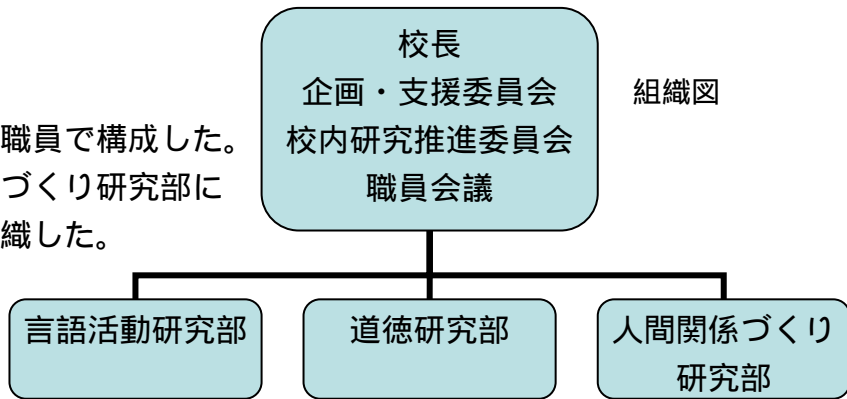
- 確かな学力を身につけさせる授業の実践
- 道徳の時間の授業を中心に据えた道徳教育の実践
- ソーシャルスキルトレーニングを中心とした人間関係づくりの実践

(2)取組をはじめたきっかけ

本校の学校教育目標は「自ら考え他に貢献できる生徒の育成」である。他に貢献できる生徒を育成するためには、豊かな人権感覚を身につけさせることが必要である。そこで、言語活動の指導を通じた人権感覚を育む授業・道徳・人間関係づくりを実践することで、自ら考え、自分の考えを明確に持ち、筋道を立てて表現できる生徒の育成を目指した。このことが確かな学力を身につけ、自分の大切さとともに他の人の大切さを認めることができる人権感覚豊かな生徒の育成につながると考え取り組んだ。

(3)取組の組織

- ・言語活動研究部は全教職員で構成した。
- ・道徳研究部と人間関係づくり研究部に教職員を2つに分け組織した。



(4)取組の内容

< 言語活動研究部の取組 >

重点目標

- 言語活動の指導を通じた人権感覚の育成
- 確かな学力を身につけさせる授業の実践

手だて

言語活動充実の視点を明確にした授業実践

具体的な取組

ア 言語活動の充実の視点を明確にする。

- ・全教科共通の視点
書く活動を通して、筋道を立てて考え、整理し、分かりやすく、自分の考えを伝えられるようにさせる。
- ・各教科のポイント
教科等の特性を活かした視点（ポイント）を教科ごとに設定する。

イ 指導の流れ

- ・書き方を具体的に指示する。
字数、キーワードの指定（ という言葉を用いて 字以内で書く）



「短歌リーディング」平和を考える授業

- ・書いた内容を確認し、指導する。(個々の生徒の考えがわかりやすくなるように)
- ・意図的に発表させる。

ウ 場面

- ・授業の最後に本時の学習内容についてキーワードを指定し、字数を制限して書かせる。

エ 指導案 (明記するもの)

- ・言語活動の充実の視点(全教科共通)
- ・言語活動の充実のポイント(教科毎)
- ・人権感覚を育む視点(人権教育上のねらい)
- ・熊谷教育の基本である「熊谷の子どもたちは、これが出来ます!」4つの実践!と3減運動に挑戦!との関わり
- ・展開の中に言語活動の充実の視点を 印で記入する。
- ・展開の中に人権感覚を育てる視点を 印で記入する。

< 道徳研究部の取組 >

全職員が共通して道徳の授業を実施できるように、授業形式を決めるため「道徳ならモデル」を作成し、道徳の時間を要とした道徳教育を実施する。

道徳ならモデル

資料分析を充分行い、柱を3つ決める。共感・葛藤・覚醒の場面を意識する。柱とする話合いに軽重をつける。深める場面では、ねらいにせまるための補助発問を用意する。

場面絵を使い導入を工夫する。資料の条件・状況(主人公、登場人物等)を設定し、資料の世界に引き込んでいく。生徒の心に響く範読を行う。

話合いでは、3人組などの少人数の形態を取り入れる。机の配置を工夫する。

見つめる場面でキーワードを指定し、自分の考えを書かせる。



板書の工夫(柱は3つ・場面絵)



話合いの工夫(机の配置)

< 人間関係づくり研究部の取組 >

人権感覚を育てるために、ソーシャルスキルトレーニングを中心とした人間関係づくりを行い、好ましい人間関係、自分自身を表現できる集団の形成を目標に実践する。

1年生神川宿泊体験学習(奈良中オリエンテーション)の実施

人間関係づくり(ソーシャルスキルトレーニング、アサーショントレーニング)を総合的な学習の時間の年間指導計画に位置づけ実施

グループエンカウンター(人権感覚育成プログラムの活用)を特別活動の年間指導計画に位置づけ実施

話し合い活動の実践

縦の人間関係づくりとして、学校行事(体育祭縦割り、奈良中ソーラン)と生徒会活動の取組



アドベンチャー教育(神川げんきプラザ)



ソーシャルスキルトレーニングの授業



生徒会活動の取組



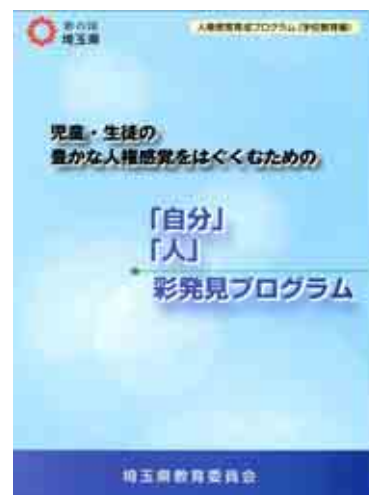
3年生が引っ張った奈良中ソーラン

<特別支援学級(ならの木学級)の取組>

・学級活動や自立活動の授業における人間関係づくりや言語活動の実践

人権感覚育成プログラムの中にある「権利の熱気球」や「匠の里」など高校や通常の学級の題材を特別支援学級の現状にあわせて、カードに使う言葉をアレンジしたり、設問を単純化したりするなど、子どもたちに理解できる方法で、ねらいをしぼって実施した。

人権感覚育成プログラムは埼玉県教育委員会HPからダウンロード
<http://www.pref.saitama.lg.jp/site/keihatusiryuu/>



4. 実践事例の実績、実施による効果

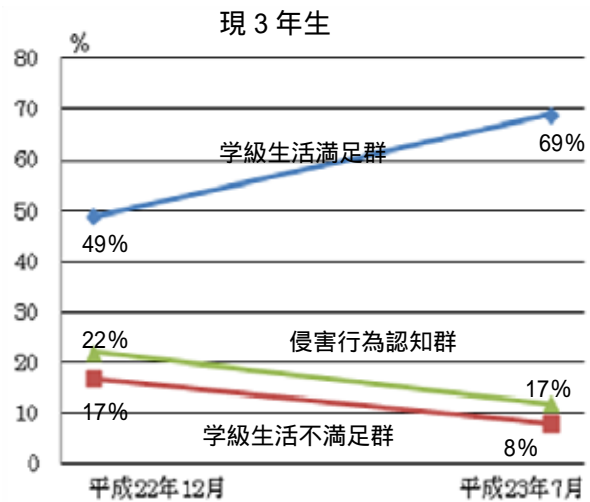
・取組が効果を上げた実際の事例

(1) 調査結果

よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート（学級集団の傾向を把握するためのアンケート）

昨年度（2年生時）と比較すると、学級生活満足群が20%上昇した。学級内に自分の居場所があり、学校生活を意欲的に送っている生徒が多くなってきている。

一方、侵害行為認知群は前回に比べ10%減少した。いじめ等の他生徒とのトラブルの可能性が高い生徒が減っている。学級生活不満足群も昨年に比べ9%の減少が見られる。この結果から、本校の取組の成果の一部を確認することができる。



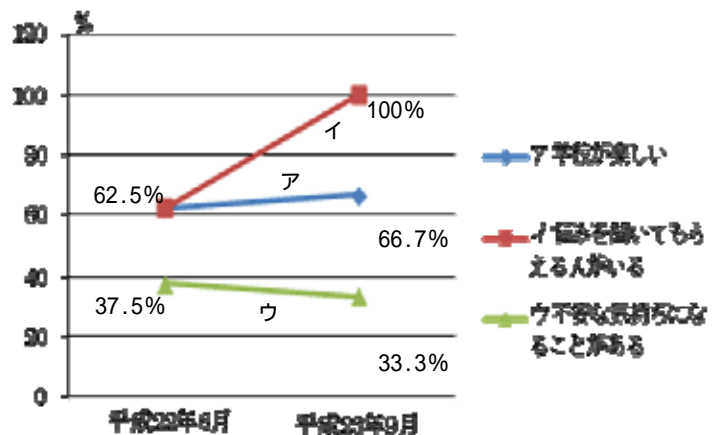
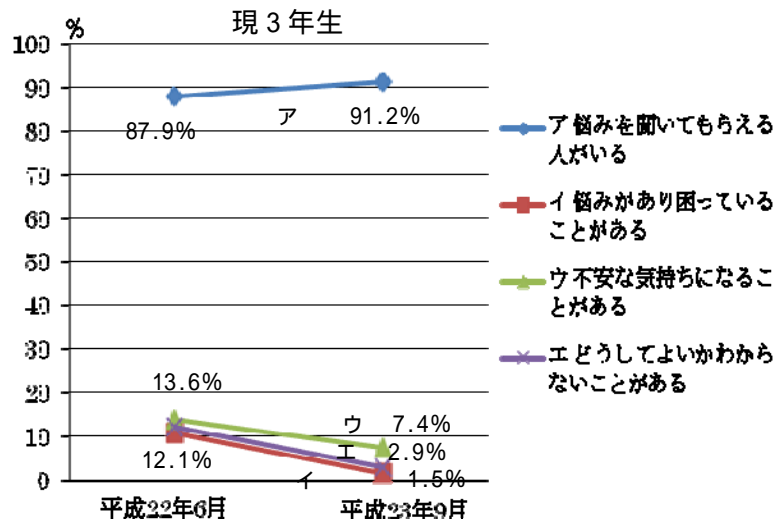
生徒人権アンケートの実施（現3年生の昨年6月と今年9月との比較より抜粋）

今の自分は・・・

「悩みを聞いてもらえる人がいる。」が増え、「今の自分は悩みがあって困っていることがある。」が減っている。また「今の自分は不安な気持ちになることがある。」や「今の自分はどうしてよいかわからないことがある。」が減少していることから、話を聞いてもらって悩みを解消したりする人間関係づくりが向上してきている。

特別支援学級での調査(抜粋)

特別支援学級の場合、昨年の調査は、卒業した生徒も含まれており同一生徒集団の結果ではないが、「悩みを聞いてもらえる人がいる。」が100%と周りの人との関わりに向上が見られる。



(2)効果

<言語活動の取組> キーワードを指定し、授業の中などで積極的に書く活動を取り入れることで生徒の書く内容が充実してきた。その結果、自信をもって発表することができるようになってきた。

<道徳の取組> 「ならモデル」を作成することで、教師の道徳の授業への意識の変化があった。そのことが、生徒の意識の変化にも反映されてきた。発問を3つに固定化することで、授業のねらいを明確にすることができた。少人数の話合いを効果的に取り入れることで、他の人の意見をよく聞き、考え、自分の意見を言えるようになってきた。

<人間関係づくりの取組> 1年生は入学直後の宿泊体験学習で、人間関係づくりを実施した結果、その後の日常生活に互いに他を大切にしようとする姿が現れてきた。人権感覚育成プログラムの活用で生徒一人一人の意見がとても大切であることに気づいてきた。生徒だけでなく教師側も人間関係づくりの大切さに対する理解が深まってきた。奈良中ソーランの練習を通して学年を超えた縦の人間関係が深まった。

<特別支援学級の取組> 交流学級を行うだけでなく、通常学級用の教材（人権感覚育成プログラム等）を子どもたちの発達段階に応じて内容を工夫・変更し実施することで子どもたちの意識に変化が見られた。特に「悩みを聞いてもらえる人がいる」が100%になるなど、自分を表現することと周りの人との関わりに効果が見られた。

5. 実践事例についての評価

(1)取組についての評価及びそう評価する理由

・人権感覚豊かな生徒の育成を目指して、2年間の取組を実践する中で、生徒の発表の内容が充実してきたことや、取組をはじめる前後で職員の意識の変化がみられた。これらの成果から、難しい取組を行うのではなく、誰でも実践できる内容を着実に実践することで、学校全体の指導力の向上に活かされたことが評価できる。

(2)保護者や地域住民からの反応

・保護者をはじめ自治会や学校応援団を中心にソーラン節のはっぴ作りや学校行事など、大きな支援を受け、中学校の活動に対しての理解も深まっている。また期待も大きい。

(3)現在、実施にあたって課題と感じていること

・心の成長は見られたが、そのことが日常生活に充分生かし切れていない。
・よりよい人間関係づくりのためには、リーダーの育成が重要である。
・生徒の授業への取組には個人差があり、苦手意識のある生徒や意欲のもてない生徒への対応を、さらに工夫していく必要がある。

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

熊谷市立奈良中学校

指導内容や指導方法において特徴ある工夫が行われている事例である。

特色としては、「アドベンチャー教育」、「ソーシャルスキルトレーニング」、「アサーショントレーニング」、「グループエンカウンター」、「生徒会活動の取組」、「奈良中ソーラン」など、体験活動型の人権教育のさらなる発展に資する取組がなされていることが挙げられる。

「学級集団の傾向を把握するためのアンケート」を活用して昨年度と本年度を比較したり、「生徒人権アンケート」を活用して昨年度と本年度を比較したりするなど、具体的な評価・検証方法により、実践の効果を高めている。

「言語活動研究部」、「道徳研究部」、「人間関係づくり研究部」を立ち上げて、学校全体が協力して、人権教育の推進に取り組んでいる。